

カラマツコンテナ苗は“形状比 100 以下”で！

育林部 二本松裕太

はじめに

長野県ではカラマツの植栽が進んでいますが、特にコンテナ苗を活用する割合が急増しています。県内のコンテナ苗の規格は苗高のみであり、様々な形状の苗木が流通していますが、コンテナ苗は専用の容器で密に育苗されることから、裸苗と比べると細長い形状になりがちです。カラマツのコンテナ苗に限らず、細長すぎる苗木は植栽後に太さを優先して成長するため樹高成長が悪いことが指摘されており、場合によっては大きくたわんでしまうこともあります。したがって、コンテナ苗の使用にあたっては苗高だけではなく細長さの指標となる形状比*を考慮する必要があります。そこで本研究では、植栽試験・育苗試験を通して、望ましい形状比について検討しました。

望ましいカラマツコンテナ苗の形状比は？

様々な条件で作成した1年生コンテナ苗を植栽した結果、形状比 80 以下の苗は枯損率も低く良好な成長を示しました。そして、形状比が 80 を超えると枯損のリスクが上がり、100 超では成長不良になるケースも見られました。形状比が 100 を超える苗は約 2 割が植栽翌年の秋までに枯損しましたので、理想的な形状比としては 80 以下、許容ラインとして線引きすべき形状比は 100 以下とするのが妥当と考えられます。

形状比100以下の苗はどう作るのか？

形状比を低く抑えるためには過剰な施肥を避け、育苗時の密度を下げるのが有効であることが明らかとなっています。今回、県内各地にある実際の生産現場においても育苗密度の調整が有効なのか、実証試験を行いました。通常 40 本の苗木を育成できるコンテナ容器を用いて 32 本/容器での育苗を実施したところ、いずれの苗畑でも 40 本/容器よりも形状比を低く抑えることができ、経営上問題ないレベルで形状比 100 以下の苗木を生産できました。

推奨規格の提案

県内のカラマツコンテナ苗の出荷規格は苗高 25cm 以上となっていますが、これに加えて「形状比 100 以下」を考慮した直径規格が必要と考えます(図)。カラマツに限らず、ヒノキやスギなど別の樹種でも植栽後の生存や成長がよくなる規格を設定すべきであり、県外の研究成果を参考にしながら検討する必要があります。

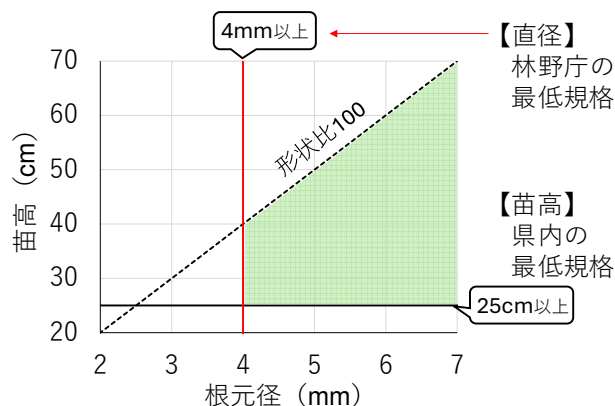


図 カラマツコンテナ苗の推奨規格

*形状比 (けいじょうひ)

樹木の高さと直径の比であり、数値が大きいほど細長い形状となる。苗木の場合は比較苗高とも呼ぶ。